

保育計画成果報告書

法人名等	社会福祉法人 美知留福社会
施設名	みちる小規模保育園
報告者（役職）	中桐 智子（園長）
住所・連絡先	岡山県倉敷市藤戸町天城95番地
	☎ 086-486-1186
	E-mail michiru.sho@outlook.jp

○タイトル（保育計画）

あそびの中から見えるもの～子どもの気持ちに寄り添って～

○主な助成備品

幼児用身長計、幼児用体重計、乳児用体重計、トンネル、トンネルスタンド
シフォンマット、とびとびバランス、テント、おくだけとおせんぼ

1. 保育計画策定の目的

みちる小規模保育園は、2018年度に開園しました。【明日もまた行きたいと思える保育園】を理想として掲げ、子どもの気持ちを第一に考えた、安心して自己発揮できる園を目指して日々保育に励んでおります。

その、“子どもの気持ちを第一に考える”という立場から、毎月行う身体測定も遊びの一つととらえ、優しく語りかけたり身体をさすったりしながら行うことで、愛されていることが実感でき信頼関係が深まる活動の一つにしたいと考えました。同時に、測定結果だけでなく測定の際の様子も伝えることで、保育者と保護者が子どもたちの育ちを共に喜び合いたいとも考えました。

また我が園は、住宅地の中に位置しており、散歩コースは車の通りも多く園庭も広いとは言えません。戸外で快適に過ごすことのできる環境や室内で思いきり身体を動かすことのできる環境が整うことによって伸び伸びと遊べるようになり、子どもたちの好奇心や自主性、独創性、集中力などが育まれるのではないかと考えました。

更に、0歳児と1歳児が同じ部屋で過ごしている中で、0歳児と1歳児の遊び空間を共に確立する必要性を感じています。向こう側の様子を見ることのできる仕切りを用いることによって、0歳児も1歳児も互いに安全に、そして安心して遊ぶことができるようになると考えました。

以上のことを踏まえ、子どもの気持ちに寄り添いながら保育実践を行っていき、遊びの中から何が見えてくるのかを考察していきたいと思っております。

2. 具体的な実施内容

毎月4回ずつ、従来の指導案の様式ではなく「予想される子どもの気持ち」と「子どもの気持ちに寄り添った配慮」という項目を設けた保育計画を作成して保育実践を行いました。以下はそれをまとめたものです。

<活動名>

ふれあい遊びとしての身体測定

<使用した保育用具>

幼児用身長計、幼児用体重計、乳児用体重計

<予想した子どもの気持ち>

触ってもらって気持ちいい、語りかけてもらって嬉しい、大きくなっているかな

<子どもの気持ちに寄り添った配慮>

衣服を優しく丁寧に脱ぎ着させてあげる。誰が関わっても同じ方法(そで脱ぎ)で介助することによって、子どもが安心して脱ぎ着できるようにする。自分一人に対して関わってくれていると感じてくれるように、手渡すような声で語りかける。穏やかに優しく触れる。ゆったりとじっくりと一対一で測定していく。測定器具を次に使うクラスに早く渡そうとして慌ただしくならないために、別のクラスの測定は別の日に行うようにする。



<活動名>

身体を動かす室内遊び

<使用した保育用具>

トンネル、トンネルスタンド、シフォンマット、とびとびバランス

<予想した子どもの気持ち>

楽しそうだな、難しそうだな、やってみよう、身体を動かすのって楽しいな、先生が見てくれていて嬉しいな、ほめてもらえて嬉しいな、お友だちと遊ぶのって楽しいな

<子どもの気持ちに寄り添った配慮>

トンネルやマット、とびとびバランスを用意して雨天の日も身体を力一杯動かせるようにする。得意げな気持ちや不安な気持ちなどで振り返った時には、優しく視線を合わせて共感していく。他の遊びがしたい気持ちも認めて見守る。子どもからの予期しない提案も可能な限り取り入れていく。



<活動名>

テントの下での快適な遊び

<使用した保育用具>

テント

<予想した子どもの気持ち>

お外に出られて嬉しいな、いろんなものが見えて楽しい、あれは何だろう、気持ちいいな
<子どもの気持ちに寄り添った配慮>

テントを設置することによって、戸外で過ごす時間を多く取り入れる。戸外に出たい気持ちを受け止めて共感の言葉をかけていく。子どもの気付きを引き出す環境構成や関わりを工夫していく。身支度を急がせることなく一人ひとりのペースに合わせてゆったりと見守ったり介助したりする。少々暑い日も水分補給に努め、水を張ったタライ、濡らしたタオル、うちわなどを使用して、テントの下で気持ちよく過ごせる時間を確保する。



<活動名>

空間を確保して行う室内遊び

<使用した保育用具>

おくだけとおせんぼ

<予想した子どもの気持ち>

楽しいな、頑張るぞ、もっともっと遊びたいな

<子どもの気持ちに寄り添った配慮>

0歳児と1歳児の空間を仕切ることによって、お互いが安心して遊べる空間を確保する。0歳児は伸び伸びと、1歳児は落ち着いて遊べる環境を整えて熱中できる遊びを用意する。



3. その成果と評価

実際に保育実践を行って遊びの中から見えてきたものについて考察していきます。

一対一で目と目を合わせてその子にだけ聞こえる声で語りかけ接していくことを心がけていくと、子どもたちもそれに応えてくれました。例えば、身体測定という、子どもにとっては必ずしも望んでいないかもしれないけれども必要な活動をするにあたって、「服を脱ぐからね」とこれからすることを知らせ、語りかけたり微笑みかけたりしながらゆっくりと丁寧に服を脱がせてあげると子どもの不安感は和らいだように感じました。また、ベビースケールに乗せる際に、あらかじめ横抱きにして「ばあっ」と声をかけて、笑顔が見られてからそっと寝転がれるようにすると、リラックスできたのか泣かないで測定することができました。泣いても仕方ないと割り切って次々と流れ作業のように行うのではなく、子どもの気持ちに寄り添って行うことで、子どもと保育者が一対一で関われる大切なひと時になったと思います。そして、これまでよりゆったりと一人ひとりに関わることで子どもたちの反応をきめ細やかに観察することができるようになったため、測定時の様子を保護者に伝えることが楽しくなりました。更に、セパレートタイプの測定器具を購入できたことにより、保育者の動線が短くなり、より安全に測定を行うことができるようになりました。

また、これまでは、暑いから室内で過ごそうと思っていたような日にも遮光テントを用いることによって戸外で過ごせるようになりました。暑いからと言ってエアコンの中ばかりで過ごすのではなく、夏の暑さを楽しむことができ、汗腺の発達にも良い影響が出たのではないかと思います。もちろん汗をかいた後はしっかりとお茶を飲んで水分補給にも努めました。

雨天など戸外で過ごせない日ももちろんあります。そんな日も室内で安全に、力一杯身体を動かすようにして行きました。とびとびバランスという体育用具を使つての活動では、いくつもの使い方ができるため、指導案では様々な活動を予定していました。しかし、子どもから「アンパンマンみたいにしたい」という発言があったことを受けて、予定していた活動を次回にとっておき、マットを丸く並べてその上を跳んでいくという活動を取り入れてみたところ、子どもたちが声をあげて喜び、活動への取り組み方もより意欲的になったと感じられました。しだいに、とびとびバランスを跳んで着地をする際には足に力を入れて踏ん張り、落ちないようにする姿も見られるようになりました。以前よりも開放的な活動を多く取り入れられるようになったこと、そして子どもたちから出た言葉を取り入れたり子どもたちの表情を読み取ったりして活動を臨機応変に変化させていくことで、全身を使った遊びに子どもたちが熱中でき満足感が得られたのか、微細な活動をする際にも以前より集中して取り組めるようになったように感じました。更に睡眠の質も向上したのか、ぐっすりと眠れるようにもなりました。

0歳児も1歳児も、互いの空間を確保することによって、保育者が制限を加えることが少なくなるように環境を工夫して行きました。おくだけとおせんぼというメッシュの仕切りを用いて互いの存在を感じながらもそれぞれのしたい活動に没頭できることで、子どもた

ちの情緒も安定し、落ち着いて遊べる時間が増えました。

我々保育に関わる者たちが子どもの気持ちに寄り添った配慮をし、環境を整えることで子どもたちはもっと目を輝かせるのだということを再確認することができました。今回、この保育計画を立て、実施してみて、このような成果が得られたことを大変嬉しく思っております。

4. 今後の課題と展望

この保育計画を策定するにあたっての目的の一つに、子どもたちの好奇心や自主性、独創性、集中力などを育みたいというものがありませんでした。そのためには、これからも日々子どもたちの姿を観察して、子どもたちに今どんな力が育ちつつあるのかを見極め、それに必要な保育環境が整えられるよう工夫していかなければならないと思っています。もっと一人ひとりの子どもの育ちを理解して、どんな環境を用意しどんなふうに関わっていけば育ちが促されるのかということを考えていく必要があると思います。

そして、どんな力も子どもたちの愛されている実感から生まれる、《自分のことが大好きで周りの人も大好き》という気持ちがあって初めて、育つものであるとの信念のもとに、子どもたちの気持ちを第一に考えた保育を提供できるようこれからも努めていきたいと思っております。そのためには実践で試みた、予想される子どもの気持ちを指導案に記載することが、大変有効であったため、今後も続けていきたいと考えています。

また、我々保育に携わる者が現状に満足することなく、それぞれが自らの保育に関する知識を深め、技術を磨いていく努力を続けていくことが欠かせないと同時に、自らの人間性を高め、子どもたちの手本となれるよう日々精進していかなければならないと思っています。そして保育士集団は、お互いに高め合える良い関係性を築き、子どもたちが安心して過ごせる環境、見習える環境を作っていかなければいけないと思っています。

そのように考えると、私たちの声は子どもたちが集中し落ち着いて遊び込むのを妨げる大きさである場合も時にはあり、目の前の子どもの頭の上を超えて、遠くの子どもに投げかけるものであることもないとは言えず、私たちが目指している、手渡すような優しい声かけが徹底できていないことが課題として挙げられます。そのような時はたいてい忙しさなどで保育者自身に気持ちのゆとりがない時が多いということも分かってきました。子どもたちが、保育者の声によって気が散って活動に集中できないようであれば、たとえ物的環境が整っていても、子どもたちの力を十分に伸ばすことはできないと思います。今一度振り返って反省し、環境や連携を見直し整えることによって、子どもたちに最善の利益を与えられるよう、これからも歩みを止めず努力していきたいと思っております。

以上